



ホットニュース Hot News

◎赤羽根図書館クリスマス企画

セルフワーク

「クリスマスカードのオーナメントをつくりましょう♪」

丸やくつ下の形に切ったオーナメントにクリスマスのメッセージを書いて、キラキラした飾りつけをします。最後にリボンをつければできあがり!

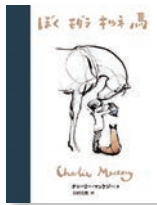
できあがったクリスマスカードのオーナメントはおうちのクリスマスツリーに飾って楽しむことができます。

期間:12月1日(水)~25日(土)

場所:赤羽根図書館こども室前

対象:どなたでも(1人1日1個まで)

参加費:無料



ぼくモグラキツネ馬

チャーリー・マッケジー/著 川村元気/訳  
 飛鳥新社

「ぼく」が旅の途中で出会う三者と自分の心のありようについて考えていく絵本。一番勇敢な言葉、言えるようになりたい。



乗りかかった船

瀧羽麻子/著  
 光文社

中堅造船会社を舞台にした人事ドラマ。明日働く元気がもらえる、全7編の連作短編集。

History Inquiry Club  
 其の 219  
**歴史探訪クラブ**

文化財課(博物館) ☎22-1720  
 吉胡貝塚資料館 ☎22-8060  
 渥美郷土資料館 ☎33-1127



博物館HP 博物館インスタグラム

◆太田洋愛と満洲、そして渥美半島

現在、田原市博物館では企画展「日本ボタニカルアートの巨星 太田洋愛展」を開催しています(11月28日まで)。田原出身の植物画家、太田洋愛(1910~1988)の科学的かつ芸術的な世界をぜひお楽しみいただきたいです。

さて、洋愛は現在の田原町で生まれ育ち、画家を志して美術学校への進学を希望するも父に反対され、18歳で単身満洲(現在の中国東北部)に渡りました。そして教科書編纂や植物図鑑の挿絵の執筆に携わりながら洋画家・植物画家としての道を開いていきました。

こうした洋愛の青年期の話を知った時、亡くなった私の祖父のことを思い出しました。洋愛より1歳年下の祖父は、田原町生まれで貧しい家の長男でした。やはり昭和はじめに仕事を求めて満洲に渡り、その後、弟たちや親戚も後に続いて行きました。

昭和初期の日本は、決して経済的に豊かではありませんでした。自らの夢を実現したり、生きていくために

世界各地に渡った人がたくさんいました。当時の満洲は日本の拠点がいくつもあり、既に移住者も多くいたことから、より魅力的に映ったことでしょう。洋愛たちと同じように、渥美半島から満洲に夢を持って渡った人が他にもいたのかもしれませんが。一方、満洲に元々住んでいた人たちからすると、日本人の進出は彼らの仕事を奪うなどの一面もありました。

そして、1945年の日本の敗戦により、移民していた人々は引き揚げを余儀なくされましたが、洋愛はソ連軍に捕われて中央アジアで3年間の強制労働に服しました。その後、38歳で帰還し、図鑑や教科書などに優れた植物画を描くことで再び画家として評価されるようになっていきました。



▲満洲・奉天の写真館で笑顔を見せる洋愛(1931(昭和6)年 個人蔵)

(学芸員 木村洋介)